

Fanfare 一期生に聞く Fanfareのその後

青木良祐



ゲストハウス「VACILANDO」

2022年11月、追分本町にゲストハウスを開業。開業前からSNSなどを中心に盛り上がりを見せていた。宿業だけでなく、SNSインフルエンサーとしても活躍しており、旅界隈の有名人。青木さんに会おうと来町する人も少なくない。

ゲストハウスに足を運んだ際「今まで見たことのない安平町の姿」という印象を持った。宿泊している人の多くが若い世代で、談笑しつつも、パソコンに向かって各々の仕事をしている。そんな、都会で見えるような光景が広がっていた。

『適度な田舎でゆっくりしつつ、主要地へのアクセスも良い場所。』「ゆっくり急ぐ」というコンセプトを体現できている」と話してくれた青木さん。このゲストハウスは開業前から話題を生んでいた。ゲストハウスの性質上「親近感の構築が重要」と考え、開業準備の段階からクラウドファンディングを活用し、たくさんの方との共創を目指す。その結果、約250人もの協力を得ることができたそうだ。これだけでも、知名度が高いとは言えない安平町において、認知度を高める機会になったのも言うまでもないだろう。

「1年目は、知り合いが多く足を運んでくれた」と振り返る。今後も、町の魅力を伝え、好きになつてもらい、足を運んでもらおうという思いがヒシヒシと伝わってきたが、課題も伺えた。「オススメする観光資源が少ない」ということ。『立地的にも盛り上がる要素は強いと思うので、どんどん盛り上げる活動をしている人とながつていきたい』と続けた。それを裏付けるのは、ゲストハウスに来る多くは、リモートワークをしながら旅をする人たち。そんな人たちは、ただ観光するのではなく、地域で特色のある活動をする人を訪ねることを目的とする旅をする人も少なくはない。

ただ言えるのは、この宿に、面白い働き方をする人が多く集まれば、大人の背中を見て育つ子どもはもちろん、大人にもワクワク感をもたらしてくれるだろう。

「楽しいことも、大変なこともたくさんあった1年。だけど、たくさんの方の種を撒くことができたと思っている」と話してくれた浅野さん。自慢のクロツフル（クロツサン生地ワッフル）を目玉商品に、取材に伺ったこの日「美味しい」とお客さんからの声が増えてきた。

安平町に来る決め手となったのは、ただの起業支援ではなく、地域おこし協力隊という制度を活用できる場所であったから。起業し安定させることは簡単なことではなく、いろんなトライをしながら進めていくことを理想としていたので、経費の面でのサポートを受けられるというのが大変ありがたいと話す。

当然のようにカフェ経営をどんどん展開していくものだと思っていたが少し違った。カ

フェ業はもちろんだが「地域の人を繋ぐ場所になっていきたい。町内で人の循環する仕組みをもっと考えていきたい」と話す。昨年は店舗前でイベント開催なども積極的に行った。「人影が見える町の方が活気があって良いと思うし」とも続けた。今年も少し違うサービスも展開しようと考えているそうだ。

「パンのサブスクリプション（一定期間利用できる権利に対して料金を支払うビジネスモデル）を通して、地域の見守りなどもできたら」と話す。地域おこし協力隊である以上、地域との連携であったり、還元というものを強く意識していることが伝わった。「冬季節に入り、安平町に訪れてくれる人の数が減っている気がする。冬を盛り上げられることも考えていきたい」と意気込んだ。



浅野浩司

カフェ「あびらカフェ」

2022年4月、早来大町にカフェを出店。安平町に来るまでは、東京都でカフェを経営するなど飲食の仕事を中心にしてきた。「のんびりとした場所でのカフェ経営」を描いているところFanfareを見つけ応募。間も無く開業1年を迎える。